

# 医療の世界で生きる女性たち

兵庫県神戸市／整形外科  
市橋 真理子さん

クリニックの患者や、施設のお年寄りを診て、  
さらには、明石海峡を渡つていく三児の母



ご長男も医師を志している。家に虫が入ってくると、捕まえて外に逃がすほど小さな命も大事にするのだとか。「家族で旅行を計画中なのですが、飼っているカブトムシが心配で行きたがらない」というご長男を説得中。「心優しいので、心のお医者さんを勧めました」と子育てにも奮闘している。【文／フレシオ編集部 写真／新出純子】

◆ 今日は、神戸市東灘区の3代続く市橋クリニックで副院長を務める市橋真理子さんにお話を伺つた。

3歳の頃に交通事故に遭い、先代の祖父が傷を縫い治してくれたのをきっかけに、幼いながらに「けがのお医者さんになりたい」と志すように。

大学生の頃、姉に誘われて、JICA海外協力隊として、フィリピンの村へ。学校のない村の子供たちの為に紙芝居を作つて、日本から持参した歯ブラシなどのアメニティで衛生管理や感染症予防などを指導する活動を行つた。興味津々に教えたことを素直に吸収する子供たちの様子にやりがいを感じ、3度にわたつて村を訪ねたという。

「じつは往診から帰つたばかりで」とにかくと笑う市橋さん。彼女の活動の幅は広い。クリニック副院長職にとどま

らず、同院の関連施設である順心淡路病院の非常勤医師も務め、さらに週に1度、淡路島へと明石海峡大橋を渡り、コロナ禍の今、学生時代からのJICAでの経験を活かしながら老健で感染症対策を徹底し、内科の役割も果たしながら、入居者の健康を守るために日々奮闘している。

八面六臂の市橋さんは、さらにはこれまで忙しい3児の母。ご主人は大学病院に勤めていて、夫婦で支えあい子育てをしながらオンコールで医師の仕事に尽力している。「一人でも多くの人々が健康で長生きしてほしい」と願う市橋さんは、これからも外外来診、老健を兼任して走り回るのだろう。